持続的収入、初期投資低く、環境守る

自伐型林業

中山間地で拡大じわり

若者 価値観にぴったり

移住者や若者が他人の山を借りて伐採や搬出を自ら行う「自伐型林業」＝②＝が全国の中山間地に広がっている。持続的に森から収入を得ることができ、初期投資も低いとして、実践者は全国で推定2000人。環境を守りながら小さな規模で稼げ、若者の価値観に合った新たな働き方だ。定住政策に据える山村の自治体も40に増えている。（尾原浩子）

自伐型林業で生計を立てる滝川さん㊨と役場担当者。滝川さんが造った自慢の作業道で10年後の構想を練る（高知県佐川町で）

NPO法人・自伐型林業推進協会によると、高知県内で300人が実践するなど、ここ数年で自伐型林業の担い手が増加している。新たに挑戦する7、8割が若者で、そのうち半数以上が移住者だという。

北海道旭川市の清水省吾さん（31）は1年前から4㌶の自伐型林業を営む。林業や森のガイド、庭の木の伐採などで生計を立てる。収入は会社員時代とほぼ同じで、自由な時間が増えた。「木材の質を高める小さな規模の林業を目指したい。生き物を守りながらの山づくりに共感する仲間がいて、わくわくする」と実感。岐阜県恵那市で40㌶の山を委託契約で管理する三宅大輔さん（40）は「山をより良い状態にして次の世代に渡す仕事は気持ちが良い。数十年後の山の姿を想像しながら木を切っている」と明るい。

同協会によると、佐川町のように、自伐型林業を学ぶ地域おこし協力隊の募集や研修を始める自治体など、36市町村4県が自伐型林業推進のための予算を持つ。ここ2年で、自主的なグループも全国に20程度立ち上がっているという。

同協会の中嶋健造代表は「採算性と環境保全を両立する自伐型林業は、自立した生き方を希望する若者の新しい価値観に合う。低コストで参入障壁が低く、中山間地の再生につながる」と利点を指摘している。

自伐型林業　採算性と環境保全を両立する持続的森林経営。自伐型林業推進協会によると、山林所有者が自ら森林の整備を行う「自伐林業」に対し、若者や移民者らが山を借りて伐採や搬出を担うことを「自伐型林業」という。

高知県佐川町の森林。間伐を終え、樹齢50年を超えた木が立ち並ぶこの山を滝川景伍さん（34）が誇らしげに見渡す。

「10年後にまた間伐する。木の価値はさらに高まって収入にもなる」と見据える滝川さん。多少の土砂災害でも崩れないよう緻密な計算をした作業道は、先輩林業者に教わって造った。長期的な視点で経営する林業は、目先の結果だけを追求しがちな今の時代の対極にあるように思え「僕に合っている」と言う。

京都市出身の滝川さんは4年前に地域おこし協力隊として同町に移住した。協力隊を卒業した現在は、地域の人から委託された森林の伐採管理を請け負う。月収は30万円弱。木材の売り上げの10％は山主に返している。

妻と共稼ぎで2人の子育てをし、山に向かう日数は月15日程度。長時間労働が当たり前だった20代の会社員の頃に比べ、ゆとりある暮らしを送っている手応えがある。

滝川さんは「やり方次第で見向きもされなかった山がきれいになり、何世代もが稼げて、地域の人にも喜ばれる。中山間地が盛り上がる」と自伐型林業の魅力を話す。

5年前から自伐型林業を町政の柱の一つに据える同町は、専任担当部署を設置するなど林業の担い手育成に力を入れる。

これまでは森林所有者が業者などに委託して伐採や植樹する以外、山を自ら管理する人はほとんどおらず、森林は荒れ放題だった。同町によると、ここ5年で若者定住の道筋ができ、住民の山への目線も変わってきた。

滝川さんら協力隊員を卒業した5人が定住した他、森林を所有する住民4人が新たに林業を始めた。現在、自伐型林業を学ぶ地域おこし協力隊は8人だ。小型のチェーンソーなどは町が貸与し、同町は林業で生計が立てやすい。元病院経営者で、兵庫県姫路市から移住し林業を目指す入江健次郎さん（50）は「最小限の機械で木を自ら切り搬出する自伐型林業。農山村の価値と山づくりの奥深さを知った」と話す。

夏は「柿氷」

果実の風味しっかり

福岡県うきは市

三堂教授による実演と出来上がった柿氷（福岡県うきは市で）

福岡県うきは市が、特産の柿「富有」を使った氷菓「柿氷（かきごおり）」の普及に乗り出している。冷凍した柿ピューレを使っており、生柿、冷蔵柿が出回らない夏でもその味を楽しめるのが売りだ。市が、中村学園大学（福岡市）の協力を得て開発した。レシピを公開することで柿ファンの裾野を広げる考えだ。

ピューレは、ミキサーにかけた果肉にシロップとレモン果汁を加える。器にピューレを敷き、その上から凍らせたものをかき氷器で削ると出来上がりだ。2層構造のため、食べ進めると清涼感とピューレ自体の濃厚な甘味が味わえる。

市は2年前に同大と広域連携協定を結び、食材としての柿の可能性を研究している。

レシピを考えた中村学園大学短期大学部の三堂徳孝教授は「産地ならではのメニュー。家庭で楽しむことで小さいころから柿に親しんでほしい」と提案する。（福岡・にじ）

傷などで出荷できない柿の活用をテーマに、地元の農家やJAにじの協力を得て成分分析や消費に関するアンケートを重ねた。髙木典雄市長は「全国に柿氷を広め、消費増につなげたい」と期待する。

5月下旬には農家や市民らを集め、作り方講習と試食会を市内の道の駅で開いた。参加した果樹農家、三浦良子さんは「柿の風味がしっかり味わえる」と太鼓判を押した。JAファーマーズマーケットの髙倉克己店長は「夏に、にじ産の柿を新たな形でPRできればいい」と期待した。

技能実習生17人結核

愛知県豊橋市は5日、インドネシアから来た技能実習生の20代男性が結核を発症、一緒に来日した実習生17人に感染していたと発表した。既に治療済みで、感染拡大の恐れはないという。市によると、男性は1月中旬に来日。同月下旬に高熱が出たため病院に行き、結核と診断された。来日前の宿泊研修で感染した可能性が高いという。他の実習生19人と病院に付き添った通訳2人を検査し、実習生17人の集団感染が分かった。

中国地方が梅雨入り

気象庁は5日、中国地方（九州北部に含まれる山口県を除く）が梅雨入りしたとみられると発表した。平年より2日早く、昨年より15日早い。向こう1週間は前線や湿った空気の影響で曇りや雨の日が多い見通し。気象庁によると、中国地方は気圧の谷や湿った空気の影響で曇りや雨になりやすい状況になっている。これまでに沖縄・奄美、九州、四国で梅雨入りしたとみられる。

ゴリパパー家

●神保あつし

字路

やっぱり牛馬も安全第一

国の重要無「塩原の大山」広島県庄原市域で行われ、の観客が見入不慮の死に見の霊を供養し馬の安全、五じょう）を祈行事で、現在保存会が継承行事は、代